キャラクター名
今脇ミサノ（いまわき みさの）

プレイヤー名

シンドローム	ブラム＝ストーカー バロール	ワークス	UGNチルドレンC	カヴァー	UGNチルドレン
オプショナル	ソラリス	年齢	18歳	性別	♀
覚醒	渇望	衝動	飢餓	初期侵食率	31 %
出自	天涯孤独	経験	脱走	邂逅	家族

	基本値	ワークス	ボーナス	成長	他修正	能力値
肉体	1	0	0			1
感覚	3	0	1			4
精神	3	1	1			5
社会	1	0	0			1

HP	27
行動値	13
(非装備時)	13
戦闘移動	18
全力移動	36

肉体			感覚			精神			社会		
技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正
白兵			射撃			ＲＣ	2		交渉		
回避	1		知覚			意志	1		調達		
運転：			芸術：			知識：			情報：UGN	1	
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		

武器・コンボ	能力	命中値	G値	攻撃力	射程	メモ
アシッド・リセット	ＲＣ	8r+2		2+6		侵蝕7。攻撃8。装甲値-5、ガード値-10でダメージ算出／命中でランク2の邪毒付与
↑＋紡ぎ＋霧	ＲＣ	10r+2		9+2+6		攻撃17
		0				
アシッド・リセット@100	ＲＣ	8r+2		3+9		攻撃12、ランク3邪毒付与

防具	価格	装甲	回避	行動	メモ

合計装甲：	0	合計回避：	0

所持品	
コネ：UGN幹部	

ロイス				
対象	感情(pos)	感情(neg)	タイタス	消費
仲間＜パートナー＞	P	N		
両親	P 遺志	N 不安		
D市支部（仲間）	P 連帯感	N 恐怖		
	P	N		
	P	N		
	P	N		
	P	N		

最大財産P: 2	残り財産P： 1

スキル名	SL	コスト	タイミング	射程	対象	判定	制限	メモ
ワーディング	★	-	オート	視界	シーン	自動	-	
効果：	非オーヴァードのエキストラ化							
リザレクト	0	1d10	気絶時	-	自身	自動	↓100	
効果：	コスト分のHPで復活							
活性の霧(5-1)	3	3	ｾｯﾄｱｯﾌﾟ	至近	単体	自動	ー	
効果：	R間、対象が行う攻撃の攻撃力＋[LV*3]、対象のドッジダイスー2個。							
コンセントレイト：ソラリス(3)	2	2	ﾒｼﾞｬｰ	ー	ー	ー	ー	
効果：	C値をーLV							
アシッドボール(3-1)	2	2	ﾒｼﾞｬｰ	視界	ー	対決	ー	
効果：	攻撃力：＋LVの射撃攻撃。対象の装甲値ー5でダメージ算出。							
メルトアウェイ(5-1)	2	2	ﾒｼﾞｬｰ	ー	ー	対決	ﾘﾐｯﾄ	
効果：	《アシッドボール》前提。組み合わせて使用。攻撃力＋[LV*3]、ガード値ー10。							
蝕む赤(5-1)	2	1	ﾒｼﾞｬｰ	視界	ー	対決	ー	
効果：	命中でランクLVの邪毒付与							
紡ぎの魔眼(3-1)	2	1	ｵｰﾄ	至近	自身	自動	ー	
効果：	判定直前に使用。判定ダイス＋LV個							
【UI】ストレンジフェイズ	1							
効果：	「技能：〈RC〉」のエフェクトを使用した攻撃判定のダイス＋3個							
かぐわしき鮮血	1	ー	ﾒｼﾞｬｰ	至近	自身	自動	ー	
効果：	血の宿る香りを嗅ぎ分け特定の個人や集団を探し出せる。必要であれば〈RC〉判定							
衝動探知	1	3	ﾒｼﾞｬｰ	至近	自身	自動	ー	
効果：	オーヴァードの血液から衝動を調べる。10分以上集中して読み取る必要がある。必要であれば〈RC〉判定							
効果：								
効果：								
効果：								
効果：								

「支部のみんなが好き。家族がいなくなった私の、家族になってもらえたって思えるから」
「なのに……なのに、私……」

私／あなた、稀にあんた。普段は強気な話し方をしていたが、根は臆病で気弱。
過去に怯える怖がりな自分を奮い立たせてくれるのは、いつも支部の仲間達だった。

D市支部に所属するUGNチルドレン。
幼少期にFHの起こした事件に巻き込まれ、家族を失う。
両親の死を目の当たりにしたことで、オーヴァードとして覚醒。
しかしその際FHに誘拐され、見知らぬ土地へと連れてこられていた。
そこを助けてくれたのがD市支部のエージェントであり、身元も能力についても分からないミサノは彼らに保護されることになった。
事件のショックで記憶が曖昧となっているものの、自身の名前と両親を失ったことは鮮明に覚えている。

10年以上支部で過ごしていることもあり、支部の面々のことを家族のように思っている。
実の両親のことは失ってもなお大事な家族だとは思っているが、それとはまた別の、生活を共にしてきた家族。
自分の能力がまだあまり強くないことを引け目に思うも、彼らに尽力し、共に強くありたいと特訓を重ねている。

〝ハーモニー〟の襲撃を受けた際、幼少期の記憶を思い出し酷く怯えていた。
前線に出るのを一旦制止されたことで、自分一人だけは助かっている。のかもしれない。
両親を助けることができなかった過去を、また繰り返したくない。
その一心で救出部隊に名乗りを上げた。